紛争の影響を受けた子どもの心理的ストレスに対する図書館活動の効果 - ミャンマー帰還難民の事例から -

立教大学　三宅隆史

要旨

本研究の目的は、①紛争の影響を受けた子どもの心理的ストレスに対する図書館活動の効果の有無を明らかにすること、②効果があるとすれば効果発現の要因を明らかにすること、の2点である。タイ国境のミャンマー難民の帰還村における図書館活動プロジェクトを事例に利用者群と非利用者群の子どもの心理的ストレス反応尺度についての質問紙調査を実施し、定量分析を行った。推定結果は、図書館活動は子どもの心理的ストレスを減少させるうえでの効果があることを示し、３種類の下位尺度のうち「無気力」(Helplessness) に対して最も効果があることが明らかになった。効果発現の要因として、第一に図書館での読書体験によって子どもは、他者とのつながり、信頼、協力の大切さを感じることができるため、孤独感や無力感が軽減すること、第二に図書館は子どもが、仲間と時間と空間を共有できる「居場所」であること、第三に、読書だけでなく、読み聞かせ、遊び、スポーツ、歌、工作等の多様な教育文化活動への参加が総体として、効果発現に寄与していることを示した。

1. 研究の背景と課題

緊急時における精神保健・心理社会的支援（MHPSS：Mental Health and Psychosocial Support) は、緊急時における人道支援の重要な介入の一つであり、人道支援機関による経験や知見が蓄積されている（UNHCR, 2017; ISAC Global Protection Cluster Working Group and IASC Reference Group for Mental Health and Psychosocial Support in Emergency Settings, 2010）。一方、その効果についての実証研究は、臨床的な心理的ケア、すなわち個人に対する心理カウンセリングやグループセラピーの効果検証は比較的多いものの、危機時に人道支援団体が取り組んでい

るChild Friendly Space（CFS）のような集団に介入する遊びや文化、スポーツ等への参加を通じたコミュニティベースの心理社会的サポートの効果検証は限られていることが、難民の心理的ストレス軽減のための研究に関する先行研究のレビューによって明らかにされている(Thompson et al., 2018；Panter-Brick et al., 2018; Tol et al., 2011)。

CFSに図書館活動を取り入れることは、赤十字などの人道支援機関によって推奨されている(International Federation of Red Cross and Red Crescent Societies and World Vision, 2018)。しかしながら、紛争や災害の影響を受けた子どもの心理的ストレスに対する読書あるいは図書館活動の効果に関する実証研究は、Google scholarによる文献レビューによれば、存在しない。

以上の先行研究レビューを踏まえ、本稿は難民の子どもに対するコミュニティベースの心理社会的サポートに関する研究に貢献することを目指したい。本研究の目的は、危機状況下における図書館活動は子どもの心理的ストレスに対する教育的アプローチとして有効であるという仮説を実証的に検証することである。本研究で扱う図書館活動は、自由読書や読み聞かせ等の読書推進活動だけでなく、遊びや工作、舞踊、音楽、絵画等の教育・余暇・文化活動、つまりCFSに読書活動を統合した活動と定義される。

本研究は以下で構成される。第２節で調査対象の事例と調査方法を述べる。第3節で分析の推定結果を示す。第4節で考察と示唆、今後の研究課題を述べる。

2. 事例と調査方法

本研究のデータは以下の教育分野の人道支援事業を通じて収集した。2016年にタイ政府、ミャンマー政府、少数民族勢力との間で、タイに逃れていたミャンマー難民の自発的難民帰還プログラムが合意された。このプログラムで20以上の難民帰還村が日本財団の支援によって設立された。公益社団法人シャンティ国際ボランティア会（SVA）は、このうち比較的人口の大きい6つの帰還村を対象地域として、コミュニティリソースセンター（CRC）を各村に１館ずつ建設し、住民による自立運営を確保するための能力強化を支援することを目的とする「ミャンマーカレン州南東部にお

けるコミュニティリソースセンターを通じた復興・再定住支援事業協力事業」を2019年４月に開始した。CRCは、住民が集い、学び、つながることを促進する公民館機能、図書や情報へのアクセスを提供する図書館機能、子どもが安心して遊び、有意義に余暇をすごすための児童館機能をあわせ持つ、多目的のノンフォーマル教育施設である。このプロジェクトの対象地域を図１に示す。

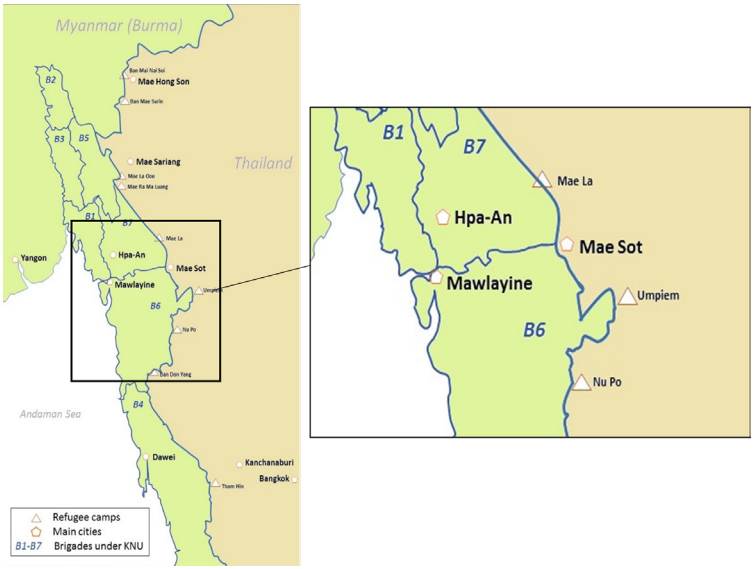

図１　プロジェクトの対象地域，地図の西側のミャンマー国のカレン州の一部が対象
（出所：シャンティ国際ボランティア会 Myanmar Border Project Office）

CRCには、子どもの本が配架された図書室と運動場、多目的ホールがあり、スタッフによる読み聞かせなどの読書推進活動が行われる他、子どもは自由に読書をしたり、ゲームやスポーツ、歌、絵画、工作等の教育・余暇・文化活動に参加したりできる（図２）。若者・成人を対象とする生計向上、職業訓練、生活改善、地域課題についての学習プログラムや住民が集うための集会室と会議室も備えている。

図２CRC の活動写真（出所：シャンティ国際ボランティア会 Myanmar Border Project Office）

外務省の日本ＮＧＯ連携無償資金協力の支援によるこのプロジェクトは、当初計画では2022年3月までの3年間実施予定であった。しかし、2021年2月にミャンマーで起きた軍事クーデターによって、ミャンマー政府と少数民族勢力の間の和平協定が破棄され、紛争が再発した。これにより、本事業対象地域の6つの難民帰還村（総人口6，738人）のうち４カ村は紛争の影響を受け、うち１カ村はミャンマー軍によって空爆されたため、全村民が国内避難民（IDP）となるなど、事業対象村へのアクセスが不可能になったことから、2021年７月にはプロジェクトの終了を余儀なくされた。

しかしながら、本研究のデータ収集時の2022年12月時点で、紛争の影響を比較的受けてこなかった2カ村では、プロジェクトの終了後も、住民組織であるCRC運営委員会によってCRCは週に5日持続的に開館し、機能し続けていた。2名のスタッフの人件費や運営活動費は、ミャンマー国内外からの篤志家からの寄付とCRC運営委員会のイニシアティブによる養魚や果樹栽培といった収益事業によって捻出されている。

CRCが開館している2カ村のうち１カ村へはタイ軍の規制によりアクセスが不可能であったため、本研究のデータは、CRCが開館し、安全にアクセスが可能な1つの村（本稿で

はA帰還村と記す）において実施された事業終了後評価調査の一環で収集されたものである。本研究のデータ収集に伴う経費は、シャンティ国際ボランティア会によって支援された。同団体および調査対象者と筆者の間に利益相反はない。

A帰還村は、カレン人が主導する少数民族勢力によって、土地の造成、家屋等の整備が行われ、2019年に開村した。2020年4月からCRCの建設、開館に向けて、SVA事務所とA帰還村のリーダーとの協議が開始された。その後、CRC運営委員会が設立され、その能力強化が支援されると共に、施設の建設工事が行われ、軍事クーデター直後の2021年4月にA帰還村のCRCは開館した。開館時の蔵書は、子どもの本が991冊、一般図書が1,721冊であった。本研究のデータ収集は2022年12月に実施された。CRCの開館から2022年12月までの期間は1年8カ月間であった（図3）。このことはCRCの利用が子どもの心理的ストレスの軽減に対する効果発現に要する期間として充分であったことを示している。

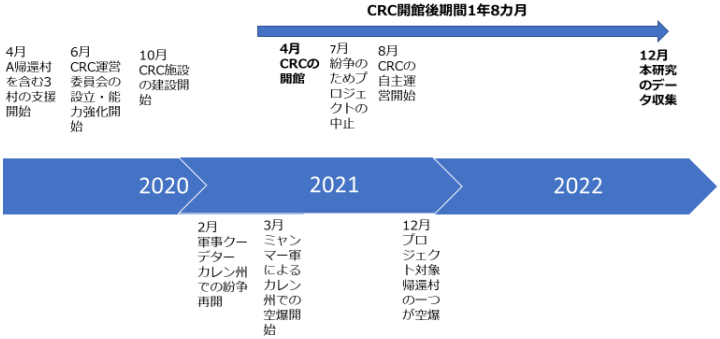

図３A帰還村でのCRC支援活動の経緯

CRCはデータ収集時において週に5日開館しており、開館以来の1日あたりの利用者の平均値は子ども16.9人、若者・成人5.5人、計22.4人で、A帰還村人口の2.6％が日常的にCRCを利用していた。CRCにほぼ隣接した小学校の教員によると、国語の授業の時間に週

に1度は教員が授業の一環で児童をＣＲＣに連れて行っており、児童の9割が自主的に週に1回以上CRCに通っている。また保健、育児、森林保全、水供給、移住、農業訓練等に関する若者・成人向けの学習プログラムはひと月あたり平均で約3回行われ、ひと月あたりのべ平均で95名が参加していた。

次に子どもの心理的ストレスの測定方法を述べる。多くの心理的ストレスのアセスメントツールの中から、災害後状況において活用されている鈴木他（1997, 2007）によって開発されたSRS-18を使用した（浅井他, 2013; 中谷他, 2017; 山口他, 2016; 吉川他, 2023)。SRS-18は、「抑うつ・不安」（Depression-Anxiety)、「不機嫌・怒り」（Irritability-Anger)、「無気力」（Helplessness）の3つの下位尺度で構成されている。それぞれの下位尺度に6つの質問があり（計18問)、4件法で回答するものである。SRS-18は18歳以上を対象にしたアセスメントツールであるが、原語の日本語を平易な英語に訳し、英語版を対象地域の子どもの家庭語であるカレン語に訳す際に、初等教育就学年齢の子どもが理解できるように配慮した。また本調査の前に、対象地域の子どもを対象に調査紙をテストし、子どもが質問を正確に理解しているかを検証し、語句の修正を行った。また読書の頻度、ＣＲＣの利用頻度、帰還村に来る前に住んでいた場所、A帰還村に来てからの期間もたずねた。質問紙の英語版を表1に示す。

本研究において以下の倫理的配慮を行った。第一に、調査対象地域の帰還村は紛争の影響を受けているため、A帰還村と匿名で表記した。第二に、調査対象の子ども、教員、若者・成人に対して、調査の目的を説明し、調査協力の同意を得た上で、調査を実施した。第3に、調査対象者の個人情報を保護している。

表1 質問紙の英語版

Questionnaire to students (original in Karen language)

Name _____ ( ) Boy ( ) Girl Class_____ Age____ School _____

Q1. *(This question is taken from SRS-18, which is translated into Karen language, the home language of the affected children along Myanmar-Thai border. Order of items are changed in the questionnaire to ensure the accuracy of responses.)*

Read the questions below and consider your feeling and behavior **in the last 3 days,** and mark the level of which you are applicable to each question. This is not a test. Please reply honestly without thinking long time.

		"No" (1)	A little "Yes" (2)	Fairly "Yes" (3)	"Yes" (4)
Example	I am easily tired.		✔		
抑うつ・不安					
5	I feel like crying.				
2	I feel sad.				
9	I feel depressed.				
3	I am worried.				
15	I need someone to comfort me.				
12	I do not like anything.				
不機嫌・怒り					
4	I feel angry.				
10	I feel irritated.				
1	I get angry easily.				
7	I feel unpleasant.				
6	I cannot control my feeling.				
8	I feel disappointed.				
無気力					
16	I am not patient.				
14	I can not express and behave properly.				
11	I am not confident on many matters.				
18	I cannot concentrate.				
13	I imagine something bad will happen to me.				
17	I want to be alone.				

Q2 How many books did you read **in the last three days?** Please check.
( ) None ( ) 1 books ( ) 2 books ( ) 3 books
( ) more than 4 books => Please write number: ( ) books

Q3 How often did you go to the CRC **in the last 7 days?**
( ) None ( ) once ( ) two times ( ) three times
( ) more than 4 times => Please write number ( ) times

Q4 Where did you live before moving to this village and when did you arrive?
( ) Refugee camp ( ) Another village
I start living here in (_____) Month (_____) year.

Thank you very much.

調査対象のA帰還村の調査時の2020年時点での人口は875名で、このうちKG（就学前クラス）から10年生の就学者は250名であった。事業開始前のデータがないため介入の前後の比較はできなかった。介入の有無による比較を可能にするために、約3平方キロメートルの広さにおよぶA帰還村に一つのCRCしか存在しないことを利用してCRCに通っている児童を利用者群、CRCまでのアクセスに徒歩で30分以上かかるためCRCに全く通ったことのない児童を非利用者群とした。

利用者群から24名、非利用者群から22名の11歳前後の子どもを無作為に抽出した。平均年齢は11.1歳であるが、紛争の影響により平均学年は2.6年であった。データ収集時点では、回答者全員がA帰還村にある3つの小学校のいずれかに通っていた。上述した通りCRCの近隣に位置する学校に通う子どもは全員、週に1回以上CRCに来て、活動に参加していることから、ストレス反応が弱いあるいはストレスの抑制が得意な子どものみが「利用者群」に含まれているという「選択バイアス」は存在しないと想定される。表2に示す変数の記述統計量が示すように、利用者群と非利用者群の子どもの違いは、主にA帰還村における居住地の違いによるCRCへのアクセスの可否と考えられる。

質問票のカレン語（母語）の質問を理解できるように、SVA事務所およびCRCのカレン人スタッフが対面で質問を音読し、必要な場合、質問の意味を説明した。回答者 46 名のうち、19 名はタイ側の難民キャンプからの帰国者であり、26 名はこの村に定住する前はミャンマー側の他の村にIDP（国内避難民）として移動しながら住んでいた。

表2 分析に用いた変数の記述統計量

変数	利用者群（n=24）		非利用者群(n=22)	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差
説明変数				
性別（0=boy, 1=girl）	0.46	0.10	0.59	0.11
学年	2.50	0.23	2.77	0.33
年齢	11.08	0.12	11.09	0.16
過去 7 日間の CRC の利用回数	2.50	0.28	0	0
過去 3 日間の読書冊数	1.96	0.16	0	0
従属変数				
ストレス反応尺度　合計	3.50	0.59	3.82	0.39
ストレス反応下位尺度　抑うつ・不安	3.50	0.51	3.73	0.46
ストレス反応下位尺度　不機嫌・怒り	3.29	0.62	3.73	0.63
ストレス反応下位尺度　無気力	3.13	0.80	3.73	0.55

*「ストレス反応尺度」の値はすべて平均値。

元難民と元IDPに対する人権弾圧、軍事的な攻撃、彼ら・彼女らの生活の過酷さの違いについては、人権弾圧・軍事攻撃の過酷さには両者の間に違いはないものの、難民キャンプにおける生活は比較的落ち着いているのに対して、IDPの生活はジャングルの間を逃亡し続ける過酷さを伴うことから、A帰還村居住者の元難民と元IDPの方が心理的ストレスのレベルが高い可能性がある。そこで、CRC非利用者および利用者の両者について、元難民と元IDPの心理的ストレスのレベルをt検定で検証したところ、有意な差はなかった（表3）。そこで、本研究では両者を区別せずに分析を行った。

表３元難民キャンプ居住者と元 IDP の間の心理的ストレスの差

	非利用者群		利用者群	
	元難民	元 IDP	元難民	元 IDP
3種の心理的ストレスの平均値	2.17	2.32	1.93	1.97
分散	0.20	0.08	0.42	0.18
観測数	8	14	12	12
t値	-0.89		-0.16	

3. 推定結果

研究課題１の「図書館活動は紛争の影響を受けた子どもの心理的ストレスの軽減に効果があるのか」を明らかにするために、利用者群と非利用者群の心理的ストレスのレベルの差を以下の方法で検証した。SRS-18のマニュアル（鈴木等、2007）に沿って、4件法から得た素点から回答を「弱い」(=1)、「普通」(=2)、「やや高い」(=3)、「高い」(=4)の4段階にカテゴリー化した利用者群と非利用者群の評定値の平均値のF検定を実施した。その結果、等分散性が確認できたので、t 検定を実施した。

表4に示す推定結果から２点の知見を得られた。第一に、「合計」ならびに「不機嫌・怒り」と「無気力」の２つの下位尺度のスコアにおいて、利用者群のストレス反応の平均値は、非利用者群の平均より有意に低かった。これは図書館活動は紛争の影響を受けた子どもの心理的ストレスの軽減に効果があることを示している。一方、「抑うつ・不安」については、利用者・非利用者群の間の有意な差がなかったことから、「抑うつ・不安」のストレス反応を下げる介入には特別な配慮（共感的な態度で接すること、安心できる環境の提供、自

己肯定感向上の支援等）が必要であると考えられる。

第二に、利用者群、非利用者群ともにストレス反応が「弱い」子どもがおらず、「合計の平均値」は97％以上、「抑うつ・不安」は100％、「不機嫌・怒り」は91％以上、「無気力」は84％以上の子ども達が「やや高い」、「高い」にあった。この点がわかったことの臨床的意味は大きい。上述した利用者群と非利用者群の有意差においても、主には「やや高い」と「高い」に分類された子どもの人数の違いなので、全般的に子どものストレス反応は高く、利用者群に対しても配慮が必要であることを示唆している。

表４ 利用者群と非利用者群の心理的ストレスの差のｔ検定の推定結果

	観測数	合計	抑うつ･不安	不機嫌･怒り	無気力
利用者群	24	3.82	3.73	3.73	3.73
非利用者群	22	3.50	3.50	3.29	3.13
差		0.32*	0.23	0.44*	0.60**
ｐ値		0.018	0.060	0.012	0.002

･値はすべて平均値
･** p<.01, *p<.05
･p値は片側の方向性を想定しているので、片側検定の結果を示す。

研究課題１の「図書館活動は紛争の影響を受けた子どもの心理的ストレスの軽減に効果があるのか」を明らかにするために、利用者群と非利用者群の心理的ストレスのレベルの差を以下の方法で検証した。SRS-18のマニュアル（鈴木等、2007）に沿って、４件法から得た素点から回答を「弱い」(=1)、「普通」(=2)、「やや高い」(=3)、「高い」(=4)の４段階にカテゴリー化した利用者群と非利用者群の評定値の平均値のF検定を実施した。その結果、等分散性が確認できたので、ｔ検定を実施した。

表4に示す推定結果から２点の知見を得られた。第一に、「合計」ならびに「不機嫌・怒り」と「無気力」の２つの下位尺度のスコアにおいて、利用者群のストレス反応の平均値は、非利用者群の平均より有意に低かった。これは図書館活動は紛争の影響を受けた子どもの心理的ストレスの軽減に効果があることを示している。一方、「抑うつ・不安」については、利用者・非利用者群の間の有意な差がなかったことから、「抑うつ・不安」のストレス反応を下げる介入には特別な配慮（共感的な態度で接すること、安心できる環境の提供、自己肯定感向上の支援等）が必要であると考えられる。

第二に、利用者群、非利用者群ともにストレス反応が「弱い」子どもがおらず、「合計の

平均値」は97％以上、「抑うつ・不安」は100％、「不機嫌・怒り」は91％以上、「無気力」は84％以上の子ども達が「やや高い」、「高い」にあった。この点がわかったことの臨床的意味は大きい。上述した利用者群と非利用者群の有意差においても、主には「やや高い」と「高い」に分類された子どもの人数の違いなので、全般的に子どものストレス反応は高く、利用者群に対しても配慮が必要であることを示唆している。

表５心理的ストレス反応の「合計の平均値」を従属変数とした重回帰分析の結果

説明変数	係数	p 値
性別	-0.22	0.067
年齢	0.12	0.189
通っている学校	0.17	0.057
過去 7 日間の CRC の利用回数	-0.22***	0.000
過去３日間の読書冊数	0.10	0.164
観察数	46	
決定係数	0.41	
調整済み決定係数	0.33	

・*** p<.001

4. 考察と示唆

これまで本事例の事業名に含まれるCRCという用語を図書館活動と同義として使ってきたが、本節における考察では、本事例から普遍的な知見を導出するために、図書館活動という用語を用いる。調査結果は、第一に、図書館活動は危機状況下にある子どもの心理的ストレスの軽減に一定の効果があること、特に無力感（Helplessness）への効果が大きいことを示した。第二に、心理的ストレス軽減の決定要因は、図書館が提供する多様な教育・文化・余暇活動（自由読書、読み聞かせ、ゲーム、スポーツ、音楽、お絵かき、遊びなど）への参加であることを示した。これらの要因として２つ考えられる。

一つ目として、図書館活動は子どもの「居場所」であることがあげられる。居場所の特徴は、家庭や学校とは異なる、仲間と空間と時間という３つの「間」を共有できる場である（田中、2016）。居場所は、空間、時間、仲間の３つの要素で構成される（田中2016）。図書館は子どもたちが、仲間と安心できる時間を過ごす空間であり、居場所の３要素を提供している。紛争や人権弾圧による心理的ストレスを抱えながらも、居場所としての図書館に来て、友人と会い、遊び、話す等多様な活動に参加することによって、子どもたちは楽しい時間を過ごし、未来への展望を抱く。その結果、孤独感や無気力が軽減すると考え

られる。

この知見を支持するデータとして、帰還難民村ではないが、タイ側の7つのミャンマー難民キャンプにおいてSVAが2000年以来支援を続けているコミュニティ図書館に通う子どもが作った以下の詩を提示する。難民キャンプの図書館においても子どもの文化・余暇活動が提供されているのであるが、この詩は主に読書の効果について言及している。しかしながら、この詩から、ミャンマー難民の子どもにとって、図書館は家庭や学校とは異なる第三の場所、ありのまま自分のままでいられる、安心して時間を過ごすことができる「居場所」であることが伺える。

図書館ができた　　作：エブトゥル（10 歳）
ぼくは毎日学校に行かなきゃならない
なかにはとてもむずかしい授業もある
先生にはときどき叱られるし、たたかれることもある
学校に穴のあいた服を着ていってともだちに笑われることもあるし、
外で遊んでばかりいると両親にも叱られる

でも今は図書館ができた。
叱られたって図書館に行って本を読んでいるうちに気が晴れる
図書館の本はぼくを叱ったりたたいたりしないし、
穴があいている服を着ていたってぼくを笑ったりもしない

とにかく僕の気持ちを満たしてくれる
こんな図書館が僕は大好きだ

2つ目に、図書館での読書体験が子どもの想像力を育むことがあげられる。図書館では自由読書や読み聞かせを通じた読書体験が重視され、毎日提供されている。読書体験は、子どもの想像力を豊かにする。物語を通して主人公と一緒にさまざまな体験をしたり、登場人物の気持ちに共感したりすることで、知らない世界や人の気持ちを想像できるように

なる。自由読書や読み聞かせを通じて絵本の世界に入ることによって、子どものつらい経験の記憶は消えないとしても、一時的に解放される。

たとえば、タイ国境のミャンマー難民キャンプのコミュニティ図書館で配架している絵本のうち、子どもたちに人気のある絵本に『スーホの白い馬』と『おさるのジョージ』がある。前者はモンゴルの大草原を舞台とする作品である。ミャンマー難民の子どもは、タイに逃れる前は山間部で暮らし、タイに逃れた後は人口が密集し、閉塞された難民キャンプで暮らしている。大草原を直接見たこともないし、テレビも無いのでその映像も見たことがないにもかかわらず、初等教育就学年齢の子どもは、『スーホの白い馬』を読むことで、主人公のスーホに感情移入し、モンゴルの大草原にいる自分を想像することができる。『おさるのジョージ』では、ジョージが飛行機や船で旅行したり、エレベーターに乗ったりする。難民の子どもは飛行機や船はおろかエレベーターでさえ見たことがないにも関わらず、ジョージと同じように旅をし、冒険するという疑似体験をすることができる。優れて普遍的な価値のある絵本は、子どもの想像力をかきたて、子どもはつらい記憶から一時的に解放される。

この知見を支持するデータとして、タイ側の難民キャンプのコミュニティ図書館に通う子どもが描いた「夢を描いたら図書館へ行こう！」と題する絵を紹介する。「パイロットになりたい」、「医者になりたい」、「先生になりたい」といった想像の世界に浸っている子どもの右下に図書館が描かれている。この絵は、図書館に行くことで近未来への展望を仲間と共有できることを示しており、ストレス軽減の一つ目の要因である「居場所」としての図書館活動についても例証していると言える。

「夢を描いたら図書館へ行こう！」（写真提供：渡辺有理子）

本研究の示唆を２点導出することができる。一つ目は、図書館活動は紛争による子どもの心理的ストレスの軽減に影響を与える可能性があるという知見は、紛争や災害といった緊急時における子どものメンタルヘルスのための事業、特にChild Friendly Spaceに図書館活動を取り入れることの有効性を示唆している。二つ目は、本研究のようなインパクト評価活動を協力事業の立案段階から組み込むことである。より妥当性と汎用性の高い知見を導出することができ、後継事業の改善あるいは他の地域での類似事業の教訓として活かすことができる。

今後の研究課題を２点あげる。第一に、心理的ストレスの決定要因を明らかにする回帰分析モデルの当てはまりを改善するためには、利用者／非利用者の心理的ストレスの違いに影響する他の要因として何が考えられるのかを検討する必要がある。図書館活動に関する説明変数は、読書冊数と利用頻度であったが、これらは図書館活動の「成果」レベルの変数（指標）であって、これらの「成果」が産出されるためには、図書館員、図書・資料、施設という３つの「投入」が必要である。これらの「投入」レベルの変数（指標）を回帰分析モデルに含めることが考えられる。また、図書館活動以外の要因として、子どもが通う学校の特徴が考えられる。本研究の回帰分析モデルでは通っている学校の種別は変数に投入しており、その係数は有意ではなかったものの、学校の特徴（施設、教員の質、教材、授

業時間、雰囲気、校長のリーダーシップなど）が、心理的ストレスの軽減に影響を与えている可能性がある。分析方法については、複数の要因についての仮説を構築したうえで、パス解析や共分散構造分析といった複数の変数が絡み合った現象を捉える方法を採用することが望ましい。

第二に、介入前のデータを収集し、パネルデータを構築し、介入の前後と有無の「差の差」の分析を行う必要がある。またサンプルサイズを大きくする必要がある。ただしこの事例では、事業開始前の難民あるいはIDPとしての生活を経て帰還村に移住した時点における心理的ストレスよりも、帰還村に移住した後の2021年2月に起きた軍事クーデター後の心理的ストレスの方が高い可能性がある。この場合、介入の前後比較の妥当性は低い。紛争影響下における事業の外部条件の変化は時系列データの収集と分析を困難にする点に留意する必要がある。

謝辞

本研究の調査の実施において、公益社団法人シャンティ国際ボランティア会のミャンマー（ビルマ）難民支援事業事務所ならびに困難な状況下においてコミュニティリソースセンターを運営しておられるA帰還村のCRC運営委員会の皆様に多大な協力をいただいた。JICAのNGO能力強化事業の一つである「途上国開発の活動の有効性と効率性を向上し、インパクトを拡大する実証実験手法の普及プログラム」（一般社団法人コペルニク・ジャパンが実施）による研修・指導をいただいた。定量分析については、高田みほ氏（特定非営利活動法人ホープフル・タッチ代表）に貴重な助言をいただいた。謝意を表します。

参考文献

International Federation of Red Cross and Red Crescent Societies and World Vision. (2018). Operational Guidance for Child Friendly Spaces in Humanitarian Settings.

Inter-Agency Standing Committee [ISAC] Global Protection Cluster Working Group and IASC Reference Group for Mental Health and Psychosocial Support in Emergency

Settings. (2010). Mental Health and Psychosocial Support in Humanitarian Emergencies: What Should Protection Programme Managers Know?

Panter-Brick C., Dajani, R., Eggerman, M., Hermosilla, S., Sancilio, A., & Ager, A.(2018). Insecurity, distress and mental health: experimental and randomized controlled trials of a psychosocial intervention for youth affected by the Syrian crisis. Journal of Child Psychology and Psychiatry, 59(5), 523–541.

Thompson C. T., Vidgen, A., & Roberts, N.P. (2018). Psychological interventions for posttraumatic stress disorder in refugees and asylum seekers: a systematic review and meta-analysis. Clinical Psychology Review, 63, 66-79.

UNHCR (2017). Community-based Protection and Mental Health & Psychosocial Support. https://www.refworld.org/policy/opguidance/unhcr/2017/en/117001

Tol, W. A., Barbui, C., Galappatti, A., Silove, D., Betancourt, T. S., Souza, R., .. & Van Ommeren, M. (2011). Mental health and psychosocial support in humanitarian settings: linking practice and research. The Lancet, 378(9802), 1581-1591.

浅井継悟, 森川夏乃, 平泉拓, 宇佐美貴章, & 若島孔文. (2013).「包括的ストレス反応尺度作成の試み」『東北大学大学院教育学研究科研究年報』62 (1), 283-302頁.

鈴木伸一, 嶋田洋徳, 三浦正江, 片柳弘司, 右馬埜力也, & 坂野雄二. (1997).「新しい心理的ストレス反応尺度(SRS・18) の開発と信頼性・妥当性の検討」『行動医学研究』4（1）, 22-29頁.

鈴木伸一嶋田洋徳, 坂野雄二, 福井至, & 長谷川誠. (2007).『SRS-18 心理的ストレス反応測定尺度』こころネット株式会社.

田中治彦 (2016).「終章これからの世界と私たち」田中治彦・三宅隆史・湯本浩之編著『SDGsと開発教育－持続可能な開発目標ための学び』学文社, 273-283頁.

中谷敬明, 山田幸恵, 藤澤美穂, & 佐藤正恵. (2017).「東日本大震災における臨床心理学的地域援助研究―岩手県沿岸被災地での心理教育の効果について―」『岩手県立大学社会福祉学部紀要』19（3）, 25－30頁.

山口摩弥, 辻内琢也, 増田和高, 岩垣穂大, 石川則子, 福田千加子, ... & 熊野宏昭. (2016).「東日本大震災に伴う原発事故による県外避難者のストレス反応に及ぼす社会的要因

—縦断的アンケート調査から—」『心身医学』56（8）, 819-832頁.
吉川かおり他. (2023).「障害者家族の生活再建に関わる要因と家族機能: 東日本大震災被災者調査からの示唆」『明星大学研究紀要－人文学部』59, 1-23頁.